

## メルヘン街道についての一考察

村越 信子

A Study of "Deutsche Marchen Strasse"

Nobuko MURAKOSHI

### 1. はじめに

ドイツには、シュトラッセ(街道)と名称の付いたものが50以上もある。いうまでもなく観光ルートとしての名称であるが、それぞれ魅力的なモチーフの糸が通っている。伝説や民話、文学、産業、歴史、建築物、風光、地形などでたいへん興味深い。

単に美しい町をつないだ、北海からアルプスに至る2,055kmの“ドイツ休暇街道”などという長大なルートもある。そんな多種多様な街道の中でも興味をそそられたのが“メルヘン街道”である。“メルヘンの”であるのは、昔から伝説や民話の故郷といわれてきた地域であり、何よりもこの街道は、19世紀初めグリム兄弟が生涯の大半を過ごし、ともに民話の収集にあたった地域でもある。そして自然の景観そのものに起因するためであろう。

このメルヘン街道は、ドイツの中央、フランクフルトから20kmほど東のメイン河沿の“ハーナウ”から出発し、シュヴァルム川、ヴェーザー川に沿って北上し北海へ流れ込む手前の町、“ブレーメン”までの約600kmの街道である。この街道沿に主だった町や村(メルヘン街道協会加盟の町)は64あるが、その中でも特に生活文化に多岐にわたり関連した町村を20カ所ほど取り上げて、それぞれの地域に根差す博物館を中心に、人々との関わりについて述べてみたい。

### 2. メルヘン街道の町々

ドイツの中央を南北に走る、このメルヘン街道〔地図〕沿いの町は、自然の景観に恵まれた自然公園を持ち、保養地としての機能が生かされていること、博物館や資料館が設置され、文化面にも力がそそがれている。そして木組みなどの家並みが美しい。さらに、民話や伝説、聖書物語などのゆかりの土地でもある。これらの民話や伝説を「グリム童話集」として、世界中の人々に愛され読まれているのは、グリム兄弟の功績によるものである。このグリム兄弟の生誕の地、ハーナウの町から出発してブレーメンまで、このメルヘン街道を追ってみることにした。

#### (1) HANAU (ハーナウ)

写真1

1785年兄ヤーコブ、1786年弟のウィルヘルムがこの地で生まれた。旧市庁舎前のマルクト広

場に立派なグリム兄弟の銅像が建っていて、基台にはめられた銅板に「ここからブレーメンまでのメルヘン街道への入口」と記されている。

16世紀に宗教迫害から逃れてきた人々が伝えた貴金属工業は、今でも町の主産業である。その歴史資料が展示されているのは、彫金歴史博物館（ゴールドミューデ・ハウスと云われる建物）である。17世紀から今日までの金銀細工の品々の展示と、その一角には中世の彫金職人作業場が再現されている。

ひととき目立つマイン河畔の、かつての領主・伯爵の城を復元したフィリップスルーエ城は、現在ハーナウ歴史博物館として使われており、その中の一室は、特にグリム兄弟の業績を称える記念室となっている。郊外のヴィルヘルムスバートには人形博物館があり、ヨーロッパの人形の歴史がわかりやすく展示されている。特にアンティーク人形のコレクションがすばらしい。



写真1 マルクト広場のグリム兄弟の銅像

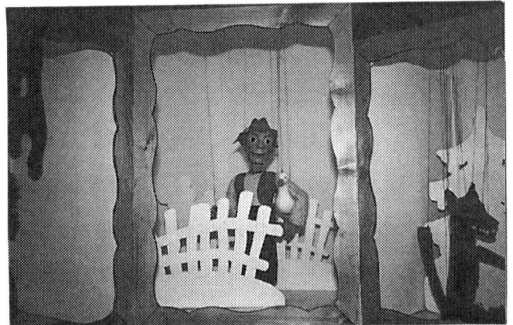


写真2 マーガーズuppe劇団の人形劇

## (2) STEINAU (シュタイナウ)

写真2

マイン川の支流キンツィヒ川につくりだす美しい谷間と、シュペッサルト山地の豊かな自然に囲まれたのどかな町。グリム兄弟の父親は、判事として赴任、一家は地方裁判所（アムツハウス）の一階に住み、二階が裁判所だったそうである。兄弟にとっては幼年時代の思い出の多い町であった。現在、この家は「ドイツ国民のメルヘンハウス」として、グリム記念博物館になっている。この地にちなんで、グリム童話の人形劇が、町役場の向かいの古い石造りの納屋を改造した劇場で上演されている。週末の上演日には子供たちを連れた人々の長蛇の列ができる。筆者は地元の方のご好意で、補助席（通路に座る）だったが観劇することができた。

## (3) SCHLUCHTERN (シュルヒテルン)

写真3

山々に囲まれた尊い修道院の町。ベルクフィンケル博物館にはグリム兄弟の遺品が展示されている。丘の上のブランデンシュタイン城には、ドイツ木製道具博物館がある。この城の主は江戸時代の医師シーボルトの子孫で、我々日本人が訪ねてきたとあって、料金もとらず、懇切丁寧に説明して下さった。展示されているものは、生活に直結した農具や台所用品などで、“ドイツ木製道具博物館”とは少々笑止。



写真3 木製道具博物館の展示とシーボルトの子孫



写真4 陶器の庭の置物

#### (4) LAUTERBACH (ラウターバッハ)

写真4

この村は、グリム童話の“ならずもの”の話の発祥の地であり、アンカートゥームの周辺の木組みの家並みが美しい町である。ドイツの家庭のガーデニングにかかせない、陶器でできた庭の置物の誕生の地でもある。

#### (5) ALSFELD (アルスフェルト)

写真5

“赤ずきん”の故郷としてよりも、むしろ木組みの家並みが美しい町として有名である。中世、ライプツィヒとフランクフルトを結ぶ商業路として栄えたところでもある。1512年に建てられた木組みの市庁舎はヘッセン地方で最も美しい木組みの市庁舎として名高い建物である。

郷土博物館、おもちゃ博物館、ワインハウスや結婚式の家など歴史にふれることのできる見所がたくさんある。



写真5 中世の面影を残す木組みの市庁舎

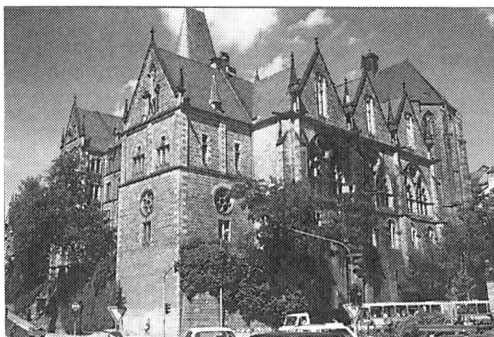


写真6 マールブルク大学の建物

#### (6) MARBURG (マールブルク)

写真6

グリム兄弟はマールブルク大学で学び、恩師ザヴィーニー先生との出会いが、兄弟の一生の方向を決定させ「子どもと家庭のメルヘン集」を生み出すことになった。パールフェーサー通りには、兄弟の下宿していた家が今でも残っていて、二階の壁面に小さな標札が貼ってある。この通りは、昔と変わらず学生たちが行き来しているのでグリム兄弟の学生時代にタイムスリップしているようである。聖エリーザベト教会、大学造形博物館、大学文化史博物館などがあり、大学の町として有名である。



写真7 民族衣装のおばあさん(頭の上に注意！)

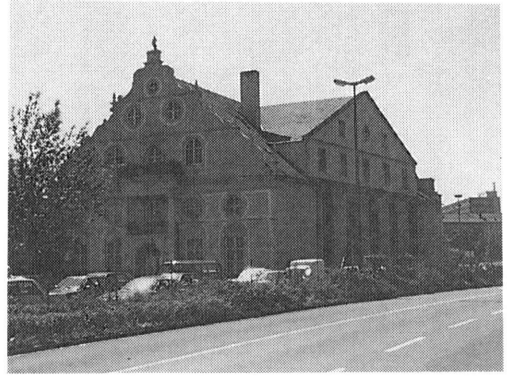


写真8 グリム兄弟博物館の建物

(7) SCHWALMSTADT (シュヴァルムシュタット)

写真7

“赤ずきん”の故郷の中心となる村々の総称。“赤ずきん”といっても、わが国の絵本にある耳まですっぽり覆う頭巾ではなく、コップを逆さにしたような小さな帽子を頭に載せているのである。未婚の乙女、既婚者、未亡人など、その帽子の色が異なるそうである。昨今では、日曜日のミサにでかけるときや、祭りのときなどに着用されるそうであるが、高齢者のあいだでは、まだまだ日常生活に生きている服装のようである。

ツィーゲンハインの集落にある郷土博物館は、“モノ”が陳列されているだけでなく、この地方の昔の生活が再現され、靴屋の仕事場、民家の居間、台所、寝室、糸紡ぎの仕事場、結婚式の様子など等身大の人形が生き生きと鎮座している。

この地方には、聖霊降臨祭の2週間後にキラートキルメス祭、フートキルメス祭などの民俗色豊かな祭が盛大に行われる。

ドイツでは、昔はどの村にもパン焼き小屋があり、共同でパンを焼いていた。この小屋はバックハウスと呼ばれていた。リーバスドルフの集落では、まだバックハウスが健在で活躍していて、人々のコミュニケーションの場にもなっているそうである。筆者が訪ねた時は、丁度焼き上がったパンを出すところで、ご相伴にあずかった。

(8) KASSEL (カッセル)

写真8

カッセルは、メルヘン街道の中でブレーメンに次ぐ大きな都市であり、メルヘン街道の丁度中間に位置している。5年に一度開かれる国際美術展・ドクメンタでよく知られている。

グリム兄弟は、古い伝説や童話を近所の子供たちや大人に語って聞かせる、名物おばさん「フィーマンさん」とこの町で出会っている。グリム兄弟は、約1年半にわたりフィーマンさんのメルヘンに耳を傾け、記述を続けた。彼等の生涯とその作品については、市内のグリム兄弟博物館で知ることができる。筆者は生憎、夏休みの休館中で入館できず、町にあるメルヘン街道協会で資料を入手するにとどめた。バロック様式の丘陵公園ヴィルヘルムヘーエ、巨大なヘラクレス像、噴水、人工の巨大な滝、ライオン城、ヴィルヘルム宮殿の美術館など見所の多い町である。



(9) KAUFUNGEN (カウフンゲン)

“ホレおばさん”の昔話のある地域のルート(ウェーザー川をはさんで東廻り)の町。修道院付属教会は、女帝クニグンデゆかりの教会である。町には採掘博物館がある。

(10) GROSSALMERODE (グロースアルマローデ)

良質な陶土が採掘される陶器の町として名高い。自然公園といえるマイスナー・カウフンガーの森をもち、ハイキングするのに最適な町である。見所としてガラス陶器博物館が在る。

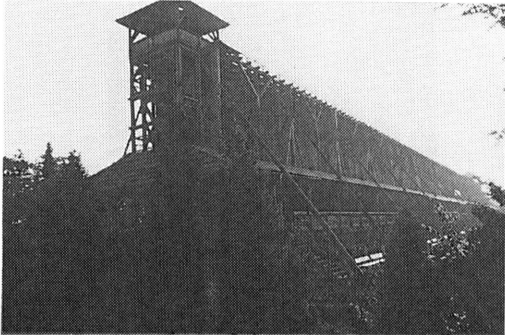


写真9 塩水を活用した保養のための施設



写真10 パン博物館の大きな木組みの建物

(11) BAD SOODEN-AlLENDORF (バート・ソーデン・アレンドルフ)

写真9

“ホレおばさん”の地域で昔からの塩と温泉の町である。湧きだす塩泉から製塩を行っていたが、19世紀半ばから費用がかかりすぎるので製塩を取り止め、そのかわり身体によい塩水での温泉保養地に生まれ変わった町である。ヴェラ川をはさんで右岸がアレンドルフ、左岸がバート・ソーデン、二つの町が1929年に合併されて現在の町名となった。塩の博物館、保養公園の塩水を活用した昔ながらの施設など見学。クアセンター内のリハビリの実習を見学することができた。

(12) FRIEDLAND (フリートラント)

写真10

モーレンフェルデの集落にヨーロッパパン博物館があり、古代から現代に至る世界のパンの文化の歴史がわかりやすく展示されている。日本の“木村屋”の専門コーナーには驚かされた。さらに驚かされたのは、展示に実物のパンを多く使っている。長期間の保存に耐える特別な製法を工夫しているのか、乾燥した気候のためなのだろうか。

中庭にはパン焼き竈があって、手造りパンを味わうことができる喫茶コーナーもある。

(13) EBERGOTZEN (エバーゲッツェン)

写真11

漫画家、画家、詩人でもあったヴァイルヘルム・ブッシュの生まれた村。今日では博物館になっているヘレンミューレンの水車小屋で、子供の頃ブッシュと彼の友人エーリッヒは、有名になった作品『マックスとモーリッツ』のように悪さをして遊び廻っていたのだろう。そんな雰囲気のある素朴な町である。

(14) GOTTING (ゲッティンゲン)

写真12

古くから大学の町として有名で、グリム兄弟が教鞭をとっていたゲッティンゲン大学は、30



写真11 マックスとモーリッツの壁画のあるレストラン



写真12 がちょう番の娘リーゼルの泉

人以上のノーベル賞受賞者を生んだ名門大学である。市庁舎前の“がちょう番の娘の泉”はこの町のシンボル。ゲッティンゲン大学の学生は、学士試験に合格すると、その学生を担いだし、馬車に乗せたりして、広場へくりだし、広場を埋めつくした市民たちの見守るなかで“がちょう番の娘リーゼル”にキスをさせた。彼女にキスできるのは、学位をもらったばかりの学生にしか許されなかったそうである。そんな伝統が守られ、息衝いている活気のある町である。

旧石器時代の発掘品から、地域の工芸品、玩具、教会芸術品など幅広く展示されている市立博物館と大学の音楽研究室附属博物館になっていて、木管、鍵盤の古い楽器に重点を置いている楽器博物館がある。

#### (15) FULDATAL (フルダタール)

グリム童話の“果報者のハンス”の舞台となった町(ウェーザー川の西廻り)。フルダ貯水場辺りを散策して、ラジオ博物館や天文台を見学。以前この町を訪れた折、ピアノ調律師の自宅が“機械式楽器博物館”として開放されていた。このコレクションは、世界的にも高く評価されて、日本のテレビでも紹介されたことがある。筆者も、自動ピアノや自動バイオリンの精巧な仕掛けや音色に、時の経つのも忘れ、聴き入ったのを思い出す。どうしたことか、残念だが現在は開館していない。



写真13 鉄ひげ博士の野外劇

#### (16) HANN-MUNDEN (ハン・ミュンデン)

写真13

周囲を山や深い森に囲まれ、ヴェラ川とフルダ川が合流しヴェーザー川となる。そんな素晴らしい環境で、木組みの家並みがたいへん引き立つ町である。木組みの家は、一階より二階が少し前に突き出て、三階はさらに出ていている。これは、税金が一階の面積によって課税されたためらしい。このような庶民の生活

の知恵が実感できる。

この町には“鉄ひげ博士”の伝説がある。18世紀に実在した実直な医者だったそうだが、やぶ医者の名声のほうが高くなってしまい、大きな注射器をかかえた滑稽な姿として伝えられている。町中には、その滑稽な姿が随所に見られる。木組みの家の柱に彫り込まれたり、木彫りの道標や、吊り看板などなど。

夏の日曜日には、マルクト広場で“鉄ひげ博士・ドクターアイゼンバルト”の滑稽な野外劇が演じられる。この日は、観光客も一段と多くなり、町中“鉄ひげ博士”一色となる。



写真 14 自然公園の鹿の群れ



写真 15 ほらふき男爵の噴水

(17) SABABURG (ザバブルク)

写真14

“森の国”ドイツの森の中でも、最も美しいといわれる“ラインハルトの森”。ブナやカシなど樹齢何百年もの古木が生い茂る深い森、そんな森の中の小高い丘の上に14世紀に建てられたザバブルク城がある。これが、かの有名な“いばら姫”のお城である。一部がホテルやレストランとして使用されている。この城の廃虚を使って、夏の観光シーズンには“いばら姫”の芝居が演じられる。

ホテルから望む城下の森や広場は、ドイツの歴史ある自然公園で、野牛、パイソン牛、野性の馬などが放し飼いとなっている。

(18) BODENWERDER (ボーデンヴェルダー)

写真15

ドイツには“ミュンヒハウゼンのほらふき男爵”という一連の奇想天外な話がある。そのミュンヒハウゼン男爵の生家が、ヴェーザー川沿いの小じんまりとした温泉保養地のこのボーデンヴェルダーにある。ここには、ほらふき男爵の遺品と称する数々の品や、彼に関する書物などを展示した博物館もある。その前には、馬の前半分だけの胴体に乗った男爵の銅像がある。胴体の後ろから流れだす噴水で、子供が遊んでいた。このヴェーザー川は、この地方の重要な交通、交易の通路だった。今も、かなり大きな遊覧船が行き来している。

(19) HAMELN (ハーメルン)

写真16・17

ヴェーザー川流域に広まっていた、華麗なヴェーザールネッサンス様式の建物が、道の両側に立ち並ぶ美しい町である。町の中央にあるオースター通りには、郷土博物館や「ねずみ取りの家」、「結婚式の家」など17世紀に建てられた、豪華な美しい建築物が目目を引く。



写真 16 ねずみ取り男の野外劇



写真 17 博物館の入口に立つねずみ取り男

夏の日曜日には、結婚式の家の前の広場で“ハーメルンのねずみ取り男”の野外劇が、町中の人々（子供から大人まで）によって演じられる。また、結婚式の家の壁面に“ねずみ取り男”のカラクリ仕掛けもある。



写真 18 運河の水門

## (20) MINDEN (ミンデン)

写真18

ヴェーザー山地と北ドイツ平野の接点にあり、古くから交通の要衝であった。旧市街には、見事な建築美をもつ1000年の歴史を誇る聖ペーター大聖堂があり、ロマネスク様式の西面が有名である。ミュンスターとハノーファーを結ぶ運河がヴェーザー川と交わるこの地形は、川と運河の高低差があるため、川の上を高さ375mの橋で運河を渡るのである。遊覧船で運河と川

を連絡する水門を見学することができる。その所用時間はおよそ20分と、あんがい短い時間である。郊外には巨大な住居のあるレジャー公園や鉄道博物館など生活に関わるものが多い。

## (21) VERDEN (フェルデン)

写真19

アラー川がヴェーザー川に合流する地点にある、城壁に囲まれた中世の町で、乗馬で有名である。千年前に建てられた、レンガ造りのゴシック式大聖堂、聖ヨハネス教会、15世紀の市庁舎など素晴らしい建築物がある。馬の生産地として知られ、馬の博物館、飼育訓練センターなどもある。フライファイト・パークという遊園地の“メルヘンの森”では、電動式の人形たちがグリム童話の世界を演じている。

## (22) BREMEN (ブレーメン)

写真20

メルヘン街道最大の都市で、ハンブルグに次ぐドイツ第二の港町。だが実際には海から50Km以上も内陸にある。そしてメルヘンの旅最終の町である。市庁舎の入口に向かって右側に“ブレーメンの音楽隊”の像が設置され、ブレーメン中央駅前には、港を象徴するように海外博物館がある。ヴェーザー河畔に近いベトヒャー通りには、コーヒー商人ロゼリウスのコレクションを展示するロゼリウスハウスがある。



写真 19 グリム童話を演じる電動式の人形

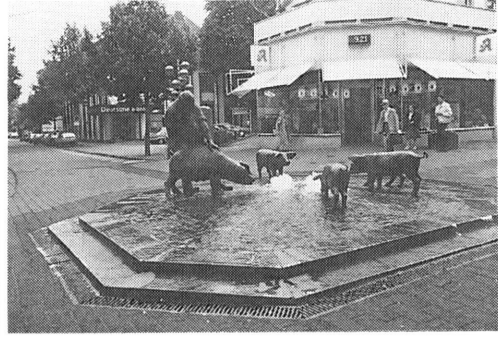


写真 20 ブタ飼いの噴水

この町には、子供たちが座るので、テカテカに光っている“ブタ”の像や“ブタ飼いの噴水”などが設置されていて、ブタにかかわるものが目出った。子供たちがブタと一体になって遊んでいる光景をたくさん目にした。昔、この辺り一帯ブタが放牧され、ブタの通り道になっていたので身近な動物であり、幸せを呼ぶ動物なのである。ブレーメンだけでなくドイツの各地で“ブタ”の銅像や噴水などを目にしたので我々日本人のブタに対する感情とはどうも違うようである。

最新情報によると、町の中心地にトレンテン博物館が9月にオープンしたそうである。“体験型博物館”で、北極、砂漠、子宮(生命の誕生)内、地震などの部屋があり、体験することができる。リピーターが多くなるように、1年ごとに展示替えをする方向で考えているそうだ。入場者を年間30万人を見込んでおり、体験するだけではないインタラクティブな博物館を目指している。このメルヘン街道に、また新しい体験の場が生まれたことは、この地を訪れる人々に幅広い満足感を与えてくれるであろう。

### 3. 考察

ヨーロッパには無数の博物館がある。それらの博物館は、人々に活力をあたえてくれるだけでなく、その土地土地の特色にも触れることができる。

ハーナウからブレーメンまで、約600kmのこのメルヘン街道沿いのどの町や村にも、必ずといっていいほど博物館とわないまでも、資料館や展示室があった。それだけドイツは歴史や文化の遺産が豊かだからであろう。

それらの博物館や資料館は、民話の舞台になった場所であり、主人公の生家であり、主人公が関わりをもった森であり、町の産業につながった企業の展示室などであった。また、ドイツ人にとって、毎日の生活に欠かせない“パン”の博物館もあって、世界のパン文化についての概要を学ぶことができた。

ハーメルンの町では、“ねずみ取り男”(グリム伝説集『ハーメルンの子供たち』)伝説を全面に打ち出し、世界のハーメルンになっている。ねずみ取り男博物館、ねずみ取り男の家、ねずみのクッキー、強烈に強い酒“ねずみ殺し”、名物料理・豚肉で作った“ねずみのしっぽ”

などなど、“ねずみ”づくしである。

夏の日曜日には、町中の子供から大人たちも参加しての“ねずみ取り男”の野外劇が上演される。マルクト広場は、ワインや焼きソーセージの屋台で賑い、足の踏み場もない盛況である。約700年前、何らかの理由で子供たちがいなくなったのは、まぎれもない事実なのである。

このメルヘン街道のメルヘンという言葉からくるイメージの他、そこで暮らしている人々の生活の仕方、その方向性などを多岐にわたり感じる事ができた。私たち人間にとって、日常の基本である「衣・食・住」が文化的にそして美的に高められているからだと思うのである。

#### (1) [衣] について

かつてメルヘン街道沿の町村は、郷土色豊かな民俗衣装があった。だが現在では、その美しい姿は冠婚葬祭や宗教行事、季節の祭などで披露されるだけになっているようである。ところがシユヴァルムシユタットの町角で、“赤ずきん”ならぬ“黒ずきん”のおばあさんに会った。まだまだ、この付近では、この民俗衣装の伝統が守られていたのだ。

ドイツ各地には、民俗衣装協会といった組織があって、伝統的な民俗衣装を保存しようという活動が、盛んにに行われているそうである。この民俗衣装を通して、その地域の生活文化を知ることができる、貴重な[衣]の文化である。

#### (2) [食] について

“バックハウス”という小屋で、パンを共同で焼いていた時代から、“ベッケライ”(パン屋)で焼きたてのパンを買ってきて、朝食をすませる生活へと変わってきた。焼きたてのパンは「本当は消化に悪いが、ドイツ人は焼きたてでないと承知しない。」と、ベッケライのご主人に話を聞いたことがある。

朝食用は、小型パン(プレートヒェン、ゼンメル)である。中型や大型のパン(プロート)は薄くスライスして食べる。そして小麦のもの、ライ麦のもの、穀類を混ぜたどっしりと重いもの、粒が細かくて比較的軽いものなどさまざまな種類がある。日本人が好んで食べる、ふわふわのパンはドイツではお目にかかれない。

フリートラントのヨーロッパパン博物館に展示されている実物のパンは、乾パン以上に保存が可能な焼き方なのだろうか……。

ベッケライには、各種のパンと並んで、ケーキが陳列され彩りを添えている。ドイツでは宗教行事にかかわるお祭りとケーキは縁が深い。2月の謝肉祭(カーニヴァル)は“揚げ菓子”。12月のクリスマスには“シュトレン”と呼ばれるラム酒漬けのフルーツがたくさん入ったものなどがその代表である。シュトレンはパンとケーキの中間のようなもので、1カ月くらいは充分美味しく食べられるように焼いてある。クリスマスに忘れてはならないもう一つは、何種類もの香料を入れて焼いた“レープクーヘン”という大きめのクッキーである。クリスマスツリー形、星形、ハート形などに焼いて、その上に少々デコレーションを加え、プレゼントや飾りと一緒に縦の木にぶるさげるのである。

(3) (住)について

博物館、資料館、展示室として使われている建物や市民の住居は、大都市に見られるような規模の大きなものは少ない。この“うつわ”としての建物は、作家ゆかりの家や民家を改装したもの、町村の中心にある市庁舎の建物、昔の領主の館や城などを十分に活用し、町の景観保存にも配慮されている。メルヘン街道の町並みの素晴しさは、中世の木組みの家々によるところが大きい。赤茶やこげ茶の柱と梁と斜材が、さまざまな交差の図形を織りなす。よく観察すると一軒一軒ちがう図形を描いているのだが、まとまりがあり見事な建築美を醸し出している。

ドイツでは、“扉”がそのまま絵葉書になってしまう。昨今は、“ボーニング”と呼ばれる集合住宅に住居を持つのが一般化しているそうだが、古い家を改造したり、手入れして使い込んでいる家もまだまだ多い。そんな家の扉の年号を見ると、1580年などという数字に驚かされる。よく見ると木材の凸凹の部分がすりへっているのがわかる。その上に施されている分厚くなった塗料が年月の重さを感じさせるが、その古さと変わらぬデザインが“美”につながっているようだ。

ドイツの一般家庭の生活は、高価なもので飾りたてるのではなく、何気なく置かれている窓辺の鉢植えや、気の利いた照明、階段空間の利用などから、実と美と清潔感を重んじていて学ぶところが多い。

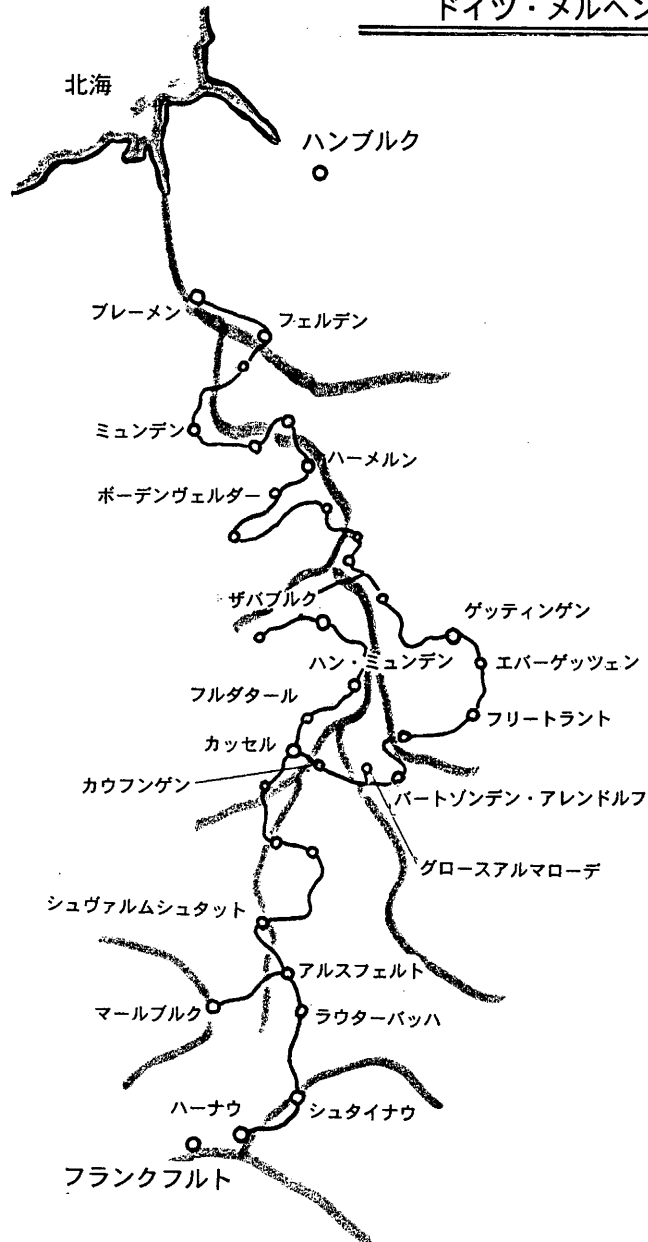
4. 結び

ドイツ・メルヘン街道の60余の町村を訪ねたが、どの町村にも自然環境を大切にし、郷土の歴史と生活文化を誇りとする、国民性の発露としての“美”が存在することが実感できた。

そして博物館などの施設に対する、市民一人一人の誇りと愛情が、訪ねる人々に快適な見学と、充実感をもたらしてくれる。



Deutsche Märchen Strasse  
ドイツ・メルヘン街道



参考文献

- 1) ドイツ政府観光局の各種資料. 1997-1999.
- 2) 小沢俊夫, 石川春江, 南川三治郎: グリム童話のふるさと. 東京, 新潮社, 1986.
- 3) 日本家政学会編: 生活文化論. 東京, 朝倉書店, 1991.
- 4) 池内 紀: 世界の歴史と文化・ドイツ. 東京, 新潮社, 1992.